

源氏物語

と き
が た り

村山リウ

主婦の友社

村山リウ

源氏物語

とき
がたり

(上)

主婦の友社

源氏物語ときがたり (上) 全三冊

定価 五八〇円

昭和四十三年四月十日 発行

著者 村山リウ
むらやま

発行者 石川 数雄

著者との了解により、
検印を廃止いたします

印刷所 明善印刷株式会社
(オフセット) 西版印刷株式会社

発行所 株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一の六
振替 東京 一八〇番
電話東京 (294) 一一一一(大代表)

序

隋、唐の大陸文化が移入されて、急激に文化開眼が行なわれた奈良時代から、京都へ都が遷り、いわゆる平安時代にはいつてももなく、大陸との交流が閉鎖しました。そのかわり外来文化を完全に咀嚼消化して、新しく日本の文化を創造したのでした。中でも特異な光彩を放ったものが、女流文芸であったことはだれもが認めることです。

それは、日記風の文体で右大将道綱の母がものした「蜻蛉日記」、才女清少納言の随筆「枕草子」、そして紫式部の長編小説「源氏物語」です。これらはいずれも後世の追隨を許さぬすぐれた文芸作品であることはいまさら言うまでもありません。

たまたま漢字から翻案された仮名文字（当時は女文字と言われた）を駆使して、心情を、自然を、世相を書きつづったものですから、そのころはもちろん長く、非常な親しみをもって読まれたものでした。

その中でも源氏物語は日本古典の中の最高峰として喧伝されましたが、なにしろ千年に近い時代の隔たりと、言葉の理解が容易でないなどで、今日一般では敬して遠ざけられている感がないわけではありません。

といって高校などの国語教科書に、たとえその一部ではあっても引用されていますが、日本の国語教育は必ずしも、文芸として楽しみ、親しませるような扱い方ではな

いので、難解なものとしての第一印象のまま放置されることが多いようです。

近年は外国でも源氏物語の価値が高く評価され、十一世紀に女性の手でこれほどの作品がと、おどろきと敬虔な態度で迎えられています。

三世代、七十余年にわたる大構想を、これほどととのった形で、これほどかぐわしい筆で、描き上げた小説を他に求められましようか。

われわれの祖先、しかも女性によってですから、女性にとってこれほどうれしいことはありません。

幸い、与謝野晶子さんの現代語訳、原文の香気をそのままの名訳谷崎潤一郎氏のものなどで源氏物語の全貌に接する機会にめぐまれ、それが手だてになって、原文に親しんでみたいという意欲を誘われた人々も多いようです。

外国語ならば翻訳によるしかないけれど、日本の言葉の美しさ、意のあるところの深さ、などに原文を通じて接すると、日本の文化の底辺がわかることであろうから、せめて五十四帖のうち何帖かを選択して鑑賞することが願わしいのですけれど。

原文は言うまでもないこと、現代語訳の場合でも、千年という隔たりでは、生活状態や社会事情、行動の是非善悪を判別する規準なども今日とはたいへんな違いです。したがってこれらの問題がひっきりになり、内容の理解が十分でないという場合が出て来るわけです。

一例ですが、美についても「をかし」は形態美、客観美です。「あはれ」は精神美、内容美を言います。さてその両者が適当な調和を保っている、それを「なまめかし」と呼

び、美の理想としてゐるほどです。なまめかしなど、今日ではニュアンスがおよそ遠い言葉になってしまいました。

たまたま主婦の友社から源氏物語のときがたりを頼まれたので、その機会を幸い、それらの問題の解説も試みながら、物語の全容をお話しすることになりました。

さて源氏物語は語り手が、話しかけるといふ形態をとっています。

女言葉での話し口調です。語っていく問々に、「これは困ったことですね」とか「このくらいのは情状酌量しましょうか」「あなたならどうお考えになりますか」などと聞き手、すなわち読み手に反問してくるのが特色です。

いつも聞き手（読み手）といっしょに「人間」について考えていこう。対話をかわしたい。というような姿勢をとっているのが作者です。

先行文学「蜻蛉日記」の主観性、「枕草子」の客観性を底辺ABに踏まえて、もののはれ〃の文学源氏物語はその頂点に光ったのでした。

さて私の源氏物語の読み方がまだまだであることは、私がいちばんよく知っています。しかし私はこう読んだことをそのままに〃語る〃ことが何かのお役に立てば、これにまさる幸いはありません。

昭和四十三年春

著 者

序……………一

源氏物語の時代と紫式部……………七

桐……………三

帚……………三

空……………五

夕……………三

若……………四

末……………四

紅……………五

花……………四

葵……………三

賢……………三

花……………一

散……………一

里……………一

木……………三

三……………三

宴……………四

二……………四

賀……………五

五……………五

花……………四

六……………六

紫……………四

四……………四

顔……………三

三……………三

蟬……………五

五……………五

木……………三

三……………三

壺……………三

三……………三

三……………三

三……………三

目 次

胡 初 玉 少 槿 薄 松 絵 関 蓬 霈 明 須

蝶	音	鬘	女		雲	風	合	屋	生	標	石	磨
.....												
三七	三九	四〇	二九	二四	二四	三〇	三〇	二七	二五	二九	一七	一五

螢		三〇	
常	夏		三三
篝	火		三四
野	分		三八
行	幸		三九
藤	袴		四三
真木	柱		四九
梅	枝		四六
藤裏	葉		四六

装丁・さしえ 岩田正巳
写真提供 長谷章久

源氏物語の時代と紫式部

原典へのすすめ

源氏物語は、戦後たいへんなブームで、芝居にも映画にもなりました。戦前から与謝野晶子の現代語訳があり、戦中の谷崎(潤一郎)さんの現代語訳は、その後何度も加筆出版されましたから、お読みになったかたも多いと思います。

しかし、現代語訳といえどもなお問題は残ります。なにしろ九百五十年も昔の物語ですから、言葉と文体の持つ情調をたいせつにした点で谷崎さんの右へ出る者はありませんけれど、行間の意味とか、当時の家庭生活、社会生活の説明まで含めることはできません。当然、現代語訳にも説明があるということになってまいります。

ところがいちいち原文に添うて解釈していきましたら、たいへんな日月を要します。ご存じのように五十四巻あり、前編の主人公は源氏の君ですが、その子ども、また次のゼネレーションと、七十余年にわたり、登場人物は三百人を越えるほどの広大かつ、深遠なスケールの物語ですから。で、これから現代語訳なり、原文なりをお読みになるときの、参考になる程度に話を進め

てまいりましょう。

原文を読みますには、

いづれの御時にか女御更衣あまたさぶらひ給ひけるなかにいとやむごとなききはにはあらぬがすぐれて時めき給ふありけり

と、声に出して読んでみてください。印刷術がなく、お互いに書き写しをしながら読むしかなかった時代ですから、中には、「読んでちょうだい」と、今日ラジオで物語を聞くように聞いて楽しむ人もあったのです。作者が話しかけていく形式をとっていますから、耳にこころよい言葉の流れを感じ、日本語の美しさがよくおわかりになるでしょう。言葉の種類は少ないのですが、その前後のありさまによって、意味が違いますので、言葉の幅の広さがある。それがまた日本語のおもしろさです。

源氏物語の時代背景

物語にはいります前に、その時代のあらましと、作者のことをお話しておきたいと思えます。

源氏物語が書かれたのは、九百五十年前です。世界の中で、最も古く、しかもこれほどの長編で重厚な小説を持っていることは日本の誇りであり、また作者が女性ですから女性の誇りでもあります。

それまでの日本で文芸作品といえば、万葉集に出ている和歌があります。日本にまだ文字がありませんでしたから、支那から輸入した漢字で万葉集は後世の人たちに伝えられました。したが

って、なかなか読みづらいことでした。

奈良時代までは大陸文化を直訳した日本でしたが、京都へ都を移しましたところから、日本の風土の中に外来文化を完全に消化した形が、衣食住のいわゆる生活文化のうえにあらわれたのです。高温多湿の京都では、建物の床がぐっと高くなり、屋根も檜皮葺き、通風をよくして暮らしくしました。着物も、袖口を広くし、体形服から直線裁ちのものに変わります。そのころ漢字から創案したかな文字が発明されました。

そうになると、公の文書以外のものは、かなで記録をとることもできるし、日本人の感情の高まりの三十一文字をさらさらとかなで書き流すことができます。古今集というすばらしい歌集が生まれたのも、かな書きのおかげです。漢字は男文字、かなは女文字と呼ばれ、男性は外来文字を駆使することにへたな誇りを持ったために、女性の手によって王朝文芸の開花がもたらされ、源氏物語のような不滅の大文芸が生まれたのでした。

平安時代は、外来文化、大陸文化が日本的に消化される時代でした。異質な文化を消化し、骨奪胎して別個のスタイルに創生していく。そんな繰り返しを何回か行なって、今日の文化を、そして明日の文化をつくる。われわれ民族はそういう天才らしいのです。

人間らしく生きた時代

「桃李言はざれども下おのずか自らみち跡を成す」という有名な句があります。桃やすももの花が咲いた。ああ、きれいだな、と人々が近づいてくる。花は黙しているけれど、花をながめるに適当な間隔をおいたところに立ち止まり、やがて立ち去ってゆく。みんなが雑草を踏み、花をめでは行き

過ぎるうちに、おのずから細い道ができてしまいます。グループで暮らす人間同士が勝手なことをしたら、世の中はどうにもしかたがないもつれになってしまいます。だれが命令するのでもなく、自分たちが暮らしのルールをつくる。それが道、すなわち倫理という形になってくるわけです。貴族社会である王朝時代には、それなりのルールがあったわけで、その理解がまず必要です。

その後武家時代が、八百五十年つぎきました。さて明治になったとき、庶民の倫理を道徳にしようか、武士の倫理を一般の道徳にしようかという論争があったのですが、武士道徳が一般の倫理にきめられたわけです。

こういうわけで、明治の社会は、武士道徳を断絶しかねたところに、人間性の尊重という点を粗末にしたきらいがないわけではありません。戦後は、人間が人間らしい生き方をしようではないか、というところへ戻ってきたと思います。ところが、八百五十年もつづいた生き方を切りかえるについて、民衆もそれをどこに求めているか、すぐにはわからない。ところが、人間尊重を基本にした考え方が、比較的こまかに記述されたのが源氏物語でしたから、源氏物語ブームを現出することになったのではないかと思うのです。

紫式部は、こう言っています。歴史の書物には、時代の表面、一部しか、描かれていない。そこには、人間がいかに生きたかということは書かれていない。ところが物語は、筋はつくりものにせよ、人間の暮らししている真実の姿を描くことから、むしろ物語の中にこそ、ある時代の人間がどんな考えで生き、どんな暮らし方をしているかと、如実に知ることができる。これは螢の巻に書いていますが、そういう信念にもとづいて彼女は源氏物語を書き上げたのです。

愛をテーマにした物語

八百五十年もつづいた武士の社会で、いちばん問題になるのは、力がオールマイティーであることです。愛の心が押えられたことです。けれども人間はみんな、愛の心を持っています。武士社会の中では、個人の心に愛と義との矛盾が絶えなかったわけです。

統領制主従関係の秩序を保っていくことが、社会秩序を保つことになるのです。その縦の序列を超越する愛は許されないことになります。そんなことから、恋愛はご法度となりました。それは武士階級だけでなく、庶民の世界にも広がったのが、徳川の封建時代です。心中物は多分にそれがテーマになり、したがって恋愛を罪悪視する傾向が出てくるのでした。

さて愛をテーマにしているのが、源氏物語です。今日学校でも愛について語ってくれない、お母さんも話してくれない。それでいて、人間がいちばん求めているのが愛です。自分に対する愛、他人への愛、異性、親子の間の愛……。恩、愛、と上下の人間関係はあっても、平等な立場での愛は不毛なわれわれの社会でした。源氏物語には、それが描かれているのです。

女権の後退と一夫多妻制

かつて女性が生産者として、経済力をにぎっていた時代がありました。今日の父系制に対して、母系制の時代です。そこでは、母親の位置が子どもの位置づけをする習慣があります。ところが、公地公民制がしだいにくずれて、開墾地が私有せられてゆくようになるにつれて、開墾能力に乏しい女性は経済力を男性に奪われていきました。

それともう一つ、だんだん日本の国が統治されて、中央政府が強力になり、中央官僚、地方官僚ができ、今日言う役人がたくさんできました。日本に初めて役人組織ができるのが、平安時代です。そこで女は家庭が生活の場、男の世界は外(役所)という形の分業になりました。かてて加えて、前代までのなごりである婿入り婚、通い婿の形態はそのまま、そこで経済力を持ちだした男性が強気になり、一夫多妻がまかりとおる生活習慣を作り出すことになります。

これは、女にとってしあわせなことではありません。女の立場が弱くなった。前時代の伝統を受けつぐ知的な女性たちの中に、女性の地位の落日を身にしみて感じる女性が幾人かありました。そういう中に、平安朝文学を生み出した女性たちがいます。

藤原氏と皇室の結びつき

当時において天皇家は、みんなの尊崇的でした。その天皇家を中心にした貴族なるものは、天皇の親類、つまり王族でした。したがって天皇家の后になる人も、王族の出身です。ところが、藤原鎌足の息子不比等の代になりまして、彼の妻橘三千代との間に生まれた光明子が聖武天皇の后になられた。臣下が初めて皇后になったわけです。お后を出した藤原氏が、ここで貴族の仲間入りをします。それから代々、藤原氏から皇后を出し、そのお子が天皇になれる。という繰り返しがつづくのであります。

ですから京都に都が移ったときには、完全に藤原氏が皇室の藩屏外戚になり、摂政関白として権力を得るのです。藤原氏の中でも、冬嗣の一統が平安時代の政権の実力者になりました。そして藤原氏は、自分のところから皇后を出すために、皇族を排斥し、王族を排斥しました。他氏排

斥だけにとどまらず、藤原氏同族間にも競争暗闘がありました。

貴族の女子待望と女流文化人の輩出

そうなりますと、藤原氏は女の子を待望する。妻にはいい娘を生まれ、いい娘を育てていくために必死になります。

蜻蛉日記は、右大将道綱の母の作品で、私小説の始まりと言ってもいいものです。この人は、三美人の一人と言われ、また歌よみとしてその才能をうたわれた女性です。藤原兼家が、相当強引な形で妻にしましたが、一年たって生まれた子どもが男の子であったことも、彼女への足が遠のく理由の一つであったのではないかと思います。二十年一日の女の、妻の悲しみを書きつづけたのが、蜻蛉日記です。

「そのころ愛誦せられたものに、唐の詩人白樂天の長恨歌があります。それに、『天下父母心不重^{こころをもちしぜずおんなをもちんず}生^う男^{をとこ}重^{おも}生^う女^を』とあるように、平安時代は女の子を生むことを貴族が望んだのです。その女の子を、天皇家での愛の競争にうち勝っている女に育てていかなければならない。天皇家も数人の后がありますので。

女性の美は形態だけではだめで、内容美、精神美(知性美)が伴わねばなりません。そのために、藤原貴族は、子女を教育する適任者を求めました。家庭教師です。教養、知性のある婦人が重宝せられました。それがたまたま、あの時代にすばらしい女性が輩出する原因をつくることにもなったわけです。紫式部、清少納言、和泉式部などと、教養のある女性が、道隆の女定子、道長の女彰子らの家庭教師として要求されたのです。

近ごろ文学賞を受ける対象が、次々と女流に回ってきているのを見ますと、どこか王朝時代に似てきたという思いなきにしもあらずです。平和な時代には、女性の存在が認められる、と言えなくもないようです。

漢学者藤原為時の娘

これだけのことを背景にして、次に紫式部のことをお話しましょう。

紫式部の父は、藤原冬嗣から六代目の為時です。冬嗣は、いわゆる藤原氏権勢の基礎を築いた人物で、代々摂政関白を出してきた権門ですが、本流以外で六代目ともなりますと、おのずと権力の座からは遠のいております。しかし最高の知識階級であることは言うまでもなく、為時は漢学者として名を成しております。

紫式部は系図の中でも「為時の女」としか出ていません。中流家庭の娘は固有名詞がないも同然で、父親の姓や役職と結びつけて呼ばれるしかなかったようです。ですから父の為時が大蔵式部丞であるというので、藤式部と呼ばれていました。

母も、同じ冬嗣の子孫である藤原為信の娘というのですから、どちらも知識階級ではあるわけです。しかし母は早く死んだのでしょう、彼女の日記を見ても、母親のことは全然出てきません。彼女の記憶にないほど早逝したのではなからうかと思えます。兄が一人と、異腹の弟妹です。すから、為時の先妻の子としては、紫式部と兄惟規と二人です。

紫式部日記の中に、「私が小さいとき、お父さんから史記を教わっていた兄が、父の質問に答えられないので、私が『それはこうでしょう』と言うと、お父さんが『なんて頭がいい子だろ